

人と向き合う情熱で社を引っ張る



会社創業の時期に開発された電子顕微鏡の前に立つ栗原権右衛門さん

電子顕微鏡の会社として戦後間もない1949年に設立された日本電子。今では30カ国以上に拠点を置く世界トップレベルの理科学機器メーカー。2008年に社長に就いた栗原権右衛門さん(68、1967年卒)は、技術開発出身者が社長を務めてきた同社では珍しい営業職出身のトップだ。

土浦一高はとにかく勉強が厳しかった。年がら年中テストをやっていた記憶がある。帰宅後も勉強したが、いつも1時間ほどで切り上げた。外地元の遊び友達が待っていたからだ。自分から積極的に話しかけるタイプではないが、人付き合いがよく、まわりにはいつ

も人がいた。中学時代から海外で働くことを夢見て、好きな英語の勉強に力を入れた。明治大学商学部に進学してからは、商業英語研究会を立ち上げて貿易実務を学んだ。

創業時から世界市場をめざす日本電子なら海外駐在員になれると思ったが、一貫して国内の営業職だった。「営業の苦労は人間形成のためにいいことばかりだった。望んだ道に進めなくても、全然がっかりすることはない。そこで自分を伸ばせばいい。」

社の代表として国内外の要人と接する中で、改めて生身の人間同士のつきあいの大切さを感じて

いる。「相手に全力で向き合い、仲良くしたいという思いを素直に出せば、きつこつまくいへ」

同社顧問の渡邊慎一さん(67、68年卒)は、入社後に何年も経ってから、栗原さんが高校の先輩だと知った。



渡邊慎一さんは「生徒がどれだけ成績を取れるか賭けて、負けて丸坊主になった先生もいた」

渡邊さんは水戸と土浦の中間地点にある、石岡市出身。伝統ある名門校の水戸第一高校も通学圏だったが、あこがれていた土浦一高に進んだ。入学直後、教室に校歌を教えに訪れた応援指導部(応援団)の先輩にひかれて入部した。

ちょうど水戸一高との野球の定期戦「土水戦」が盛り上がりつつあった(77年まで開催)。「水戸一高というライバルがいることで切磋琢磨できた。競争意識を持つことは大事です」

大学は、キリスト教文化を感じさせる青山学院大学に進学した。卒業後は世界をめざして日本電子に。常に外の世界をめざしてきた。

今、年間100日は海外にいて、国際会議でプレゼンテーションもする。英語力は不可欠だが、それより大事なのは「知れたら」「伝えたい」という情熱だと言う。「怒るときは、どいかにしても日本語。そのほうが伝わりますよ」